

## 詩編 第119編 71節

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」

これは、苦しみの渦中の人にはなかなか難しい歌です。痛んでいる者の前では、なかなか語れない言葉です。苦しみと痛みは心身ともに傷つけ、痛めつけます。歌う時、あなたは私の苦しみ、痛みを分かっていません、と責められるかもしれません。この歌は簡単には歌えません。

ただ、この歌い手のように、私の体験として歌うなら誰も異を唱えることは出来ない。私が苦しみに会いました。その体験が私にとってしあわせでした。他の誰かが、それは考えられない、と言ったとしても、私にとってしあわせでした。他の誰かが、そんな歌は単なる精神主義にしか過ぎない、と批判しても、私にとってしあわせでした。他の誰かが、そんな歌は理屈に合わない、空元気の話だと非難しても、私にとってしあわせでした。すでに私の苦しみを体験し、すでに私のしあわせを体験したのです。誰も打ち消すことが出来ない私の体験です。

ただ、私にはしあわせの訳があります。苦しみを覆す訳があります。その訳を体験したのです。苦しみのなかで、あなたのおきてを学びました。これがしあわせです。